

「玄徳さん」

「ん？何だ？」

花は旅支度を済ませて、ざわめく町中を過ぎた所で、少し先を歩く玄徳の広い背中に声を掛けた。

「あの、この子さんですけど、名前がないのは不便だと思っんです。その、玄徳さんはちゃんとした名前を知ってるんでしょうけど、今そう呼ぶ訳にもいかないし、いつまでもこの方って言うのも変ですし」

花は腕の中ですうすうと寝息を立てている、赤ん坊を見下ろした。最近ではようやく、花があやしても寝てくれるようになってきた位、世話にも慣れてきていた。

「…それもそうだな。花、お前に何かいい案でもあるのか？」

「…叶って言うのはどうでしょう？」

立ち止まって振り返ってくれた玄徳に「ちよつと抱っこしてて下さいね」と、赤ん坊を預けると、手頃な棒きれを見つけて土の上に『叶』と書いて示した。

「私の国で『願いが叶う』の『叶う』と言う文字です。

この子が大きくなった時に自分の思いが叶えられると

いいなって、そう思つて」

「そうか、叶か」

玄徳は赤ん坊を抱きながら、器用に顎に手をやるとうんうんと頷いた。

「いい名前だな。なんだ花、ちゃんと親らしい事が出来てるじゃないか」

「いえ、そんな事…」

俯く花の頭に、ボンと玄徳の大きな手のひらが乗った。

「大丈夫だ、親だつて最初から親になる訳じゃない、子供と一緒に育つていくんだ。だから、そんなに気負うな」

手のひらは花の頭の上で数度弾んだ後、離れていった。

その温もりが離れるのを寂しいと思うなんて、いよいよこれは重症だ。そう思うのと同時に胸がぎゅつと締め付けられるようで。

花は玄徳に気づかれないように、そつと熱くなった息を吐いた。